

◆目次

プロローグ

1. 悶絶の試供薬（エネマ）
2. 肛虐医師
3. 搾り上げの浣腸室
4. SMクラブ「女殺庵」
5. 瀕死を与える赤と青「インタステン潰し」
6. 抜き女の浣腸愛奴

エピローグ



【登場人物】

- ・内山沙織（25 歳）

長い黒髪に健康的な肌をした美しい美女。

ニジク製薬でセールスレディとして働いている。

会社が企業舎弟であることが判明するとともに変質者達の思惑に巻き込まれていく。

- ・中西^{たつろう}巽狼（36 歳）

後門会直系中西組の組長をはる経済やくざ。

裏社会はもとより医師連盟、財界人とも繋がりがあがる。

- ・本庄由紀江（27 歳）

色白の美しい女性。 昼はレースクイーン。

SM クラブ「女殺庵」で^{ぬきめ}抜き女として働いている。

- ・ヤク・シュンミン(65 歳)

年季の入った薬剤師で、SM の界隈では調薬老師と称され、様々な毒や薬の調合を得意としている。

SM クラブ「女殺庵」総支配人

- ・リ・セイウン(51 歳)

元医師。蘇生術の権威。

SM クラブ「女殺庵」副支配人

【プロローグ】

東京都江東区に、白く聳える
株式会社ニヂク製薬の自社ビル。

この会社は長いチューブ付きの押し出しタイプの浣腸
や、太い座薬を主に販売している大手の製薬会社であ
る。

ふわりと爽やかな香りを振りまき出社する美しきセール
スレディ内山沙織。

大学卒業後、すぐにニヂク製薬に就職。

営業課に配属され、地道に売上げをあげていたが、
ここ数年では不況のあおりを受け、会社全体の売りが上
げが落ちてきている。

この日、沙織が出勤すると、
見たこともない金髪で下品な紫スーツを着た大男が常務
と話をしている。

「・・・だから、どないやねん売上は。」

「え・・・ええ、ぜ・・・全体の売りが悪いですが、
都内全域の病院と取引ができており・・・。」

常務は、
この大男の質問にしどろもどろだ。

「あの・・・おはようございます。」

ふたりの間に長い黒髪をたなびたせて沙織が通り、挨拶をした。

(ん?) 大男の目がギラリと光る。



「なんやニヂクは、こんな可愛いらしい社員がおるんかいな。おう？」

大男は通り過ぎようとする沙織の尻に手を回し、ピシヤリと叩く。

「・・きゃっ!？」

何をするのです・・! 常務この方は・・!？」

「・・お前気が強そうやなッ!!

俺はこういうもんや! よう見い!」

大男はスーツをめくり、仰々しい入墨を見せた。

明らかに本業の墨だ。

(やくざ・・!?)

何故、やくざが会社の中に・・?

「う・・うちの営業課の子です。」

「こないな美人、よう浣腸の会社に勤めたもんや

な・・浣腸が好きなんか? おう?」

「.....。」

「黙っとらんで答えんかい。浣腸が好きなんか聞いとるだけやろうが。」

「あ・・あの・・常務。」

「中西さん、ま・・まあ、こんなところで話すのもなんですから・・。」

「ふん、じゃあ悪いちゅう営業課の成績でも見せてもらおか。」

「こ・・こちらへどうぞ。

・・ほら、内山君も来なさい。」

この男は後門会直系中西組の組長をはる経済やくざ。

中西^{たつろう}巽狼。年齢は 36 歳。

医師連盟、財界人とも繋がりがあがる剛腕と聞いた。

「なんや悪い数字やな。

・・もっと気張らんかい。」

「・・すみません。

あ、ですが、内山はまだ成績がいいほうでして・・。」

「ほう。こんな美人なら納得だが、まだまだ伸ばせそうや。内山沙織の履歴書、拝見させてもらおか。」

(履歴書・・・どうして・・・)

(このやくざは何故、営業の成績なんか・・・。
それに常務はヘコヘコとごまをすっているのだ。)

沙織が周囲の社員を見る。

だが、誰もがバツが悪いようにスッと目を逸らす。

(他の社員も、目を逸らし、関わらないようにしている。
・・・どうということ。)

「う・・・内山君、実はね。」

この後、常務の口からニジク製薬が後門会直系中西組の
企業舎弟であることが判明する。

「・・・せや、ニジク製薬は企業舎弟ちゅうわけやな。
内山ちゅうたな。

・・・上納金が減った企業がどうなるかわかるか？」

「・・・知りません。」

「おう沙織。これからお前の家族、親戚、彼氏の情報ま
で見させてもらうんやで、よーく考えて答えや。」

！！？

「・・・ど・・・どういことです。どうして家族の情報なんか・・・。」

「わはは、肉弾もさせてもらおか、のう常務。
後には引けん、もう逃げられんぞ。」

「あ、あのッ！あのッ！」

常務を見ても、目を固く瞑っている。

「・・・どういことなの。」

「この方は中西^{たつろう}巽狼さんといって、会長よりも上の権限を持っているんだ。内山君、よく話を聞くんだ。」

「お前がここで逃げたら、家族が酷い目に遭う。
逃げずに身体を張れば、成績アップさせたる。
どうや、選択肢ないやろうが。」

「か・・・身体・・・？」

中西はおもむろに

沙織の後ろに回り込み、腰を下ろして屈んだ。

(・・・え！？)

両手を組み、人差し指を重ねて突き出す。

「身体を張れっちゅうんはな！」

ズブリ・・・ッ！



「あッ！・・・くうッ！」

「こういうこっちゃ。」

肛門から直腸に鋭い衝撃が走った。

指カンチョーだ。

腰を庇って崩れる沙織を仁王立ちに見下ろし

「浣腸のセールスレディなら、客に浣腸させてなんぼやるッ！」と訳の分からない激を飛ばした。

女を使え。一軒、一軒まわり、客に「ニジク浣腸」の効果を見せ、営業してこい。

そしたら経営もあつという間に回復だ・・と言うのだ。

これには、同じ部署にいたセールスレディ達も絶句している。

(・・こんなことが許されるの!?)

「そうや、沙織だけやない。

お前らの履歴書も見せてもらうからな。

見て見ぬ振りしとるんやないで。

これから、ひとりひとりワイに身体を開くんや。味見しながら、営業のいろはを教えこんだる。」(体を開く・・?)

(.....!)(.....!)

やくざ特有のけたたましさだ。

恫喝に、セールスレディたちも芯から脅えている。

常務が用意したベッドが置かれている個室に、営業課のセールスレディがひとりひとり案内されると、すぐに裸にされ、順番に性交を行いながら中西流の営業のいろはを教えられた。

「あああッ！ふ・・深いッ！くああッ！」

「むう・・おおっ！そんなに突かないで！」

「うるせえな、ヨガってないでキチンと聞けや。
いいか・・浣腸のセールスレディだったらな営業のポイントは3点だ。」

- ・いやらしく浣腸をねだる。
- ・浣腸されたら腰を振って喜ぶ。
- ・排泄はつぶさに見て貰う。

等を膣を突かれ、挿られながら、教えられた。

異常な、異常な事態だ。浣腸営業という如何がわしい営業を行えと言うのだからおぞましい。

そして、ひと通り教えた後

肉棒が震え・・

「うっ！ほなイクで！」

(・・えッ！?)

「そら、栄養だッ！」

「あ・・ああッ！いやあ・・。」

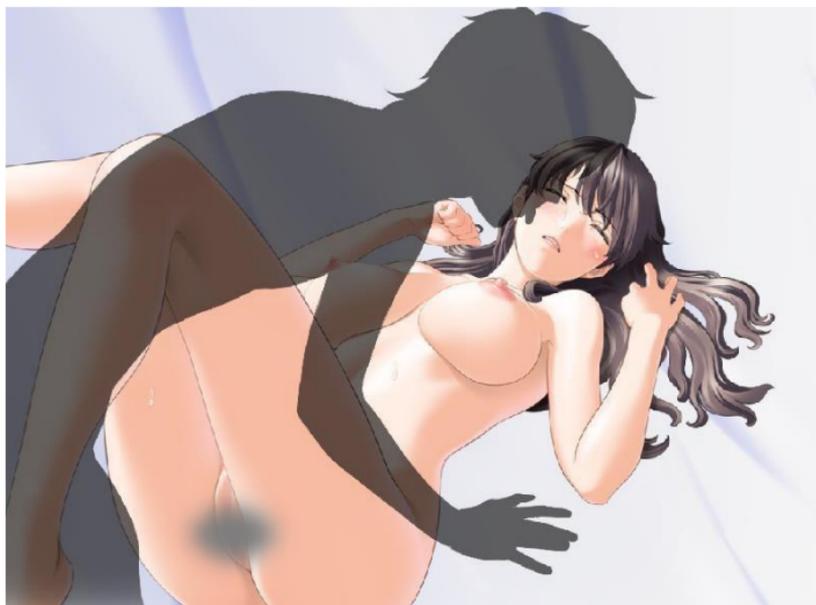
栄養をつける。

中西^{たつろう}巽狼曰く、それは子宮へ自分の精子を送り込むことだという。子宮が精子を吸収することで活力が漲る。営業が捗ると言って、ひとりひとりの子宮に出していった。

セールスレディは20人居る。

全員の子宮に精を放ったと言うのだから信じられない。
とんでもない性豪だ。

「おら、次は内山、入ってこいや。」



最初沙織は抵抗したが、信じられないような腕力で押さえつけられた。

それでも身体をよじって逃げようとしたところ

鳩尾に拳をいれられ、顔を殴られると、中西のされるがままとなった。

1. 悶絶の試供薬（エネマ）

千葉とある住宅街

訪問を指定された邸宅の前で沙織は戸惑っていた。

「・・・この家だわ。」

これまでのセールスとは全く違う。

足が重く進まない。

客に浣腸薬の効果を見せること。

要するに「浣腸される」「排便を見られる。」という普通の女ならば、恥辱に嗚咽してしまうようなものだ。

だが、相手は広域指定暴力団。

拒んだら何をされるかわからない。

面接の際に渡した履歴書には、緊急連絡先として実家の住所まで記載していた。

そこから親戚や彼氏のことまで調べられているという。

同じようにセールスに向かった同僚達。

自分が拒めば、彼女達も連帯責任で酷い目に遭うと脅された。

「・・・もう、逃げられない。」

ーピンポ〜ン。

覚悟を決め、チャイムを押した沙織。

このひと押しから、世の男性の歪んだ欲望をまざまと見せつけられることになる。

出てきたのは30代と思しき男性。

体型は太めで、訪問した沙織を、いやらしい顔つきで見ている。

「薬売り？どこの・・・？」

沙織の格好は薄着で白のホットパンツだ。中西からそれを着用しろと言われている。

「・・・ニヂク製薬です。」

「・・・へえ〜、浣腸の？」

男性の顔が急に真顔になると、

沙織を見る目が好奇心なものに変貌。「い・・・いかがでしょうか。」

「お姉さんも、
・・・これ使っているのかい。」

「・・・え、ええ。
・・・便秘の時などに。」

「そうだな。買うかどうかは、お姉さんが浣腸された反応を見て決めるとしようか。」

「・・・・・・・・。」

沙織は諦めたような表情で
ふう～～～・・・と深く息を吐き出した。

いままでのセールスでは、
何回か体験した会話の流れであった。

「今は便秘ではないもので。」
などと、適当にあしらってきたが今回ばかりは違う。

「・・・わかりました。
わ・・・私に浣腸をお願いします。」
あしらわれるとばかり思っていた男性は、
キョトンとした顔で目を丸くしている。

(本当かよ・・・。こんな美人に浣腸ができるって。)

そして沙織の態度に面食らうも、いやらしい感情が込み上げ、むくむくと勃起した。

「あの・・・玄関では恥ずかしいので、おあがりして宜しいでしょうか。」

目を見開いたままの男性は、直立不動のまま顔を縦に降る。「では失礼します。」



セールスバッグに仕込まれた小型マイクから、沙織の会話は録音されている。

客を圧倒するように、仕込まれた媚態を言う。



「ほ・・本当にいいんだな、ほらこれだぞ。」

「・・ええ。」

とても恥ずかしいですが、仕事ですので・・」

男性の部屋に入ると、沙織は渡しニジク浣腸見せられながら、顔を真っ赤にし服を脱いで行く。

「・・こちらのベッドをお借りしますわ。」

よろしいですか。」 「あ・・ああ。」

はあ～・・はあ～・・。

ニジク浣腸を持つ手に力が籠る。

ベッドの上、股を開いた沙織を見ると、非現実で官能的な興奮に、すっかり黙り込む男性。



かわりに、はあ～・・・はあ～・・・と
唸りだされる呼吸が聞こえる。

「それでは、私にか・・・浣腸を。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・お願いします。」

沙織も心臓を手で揉まれたように心拍数が高い。

恥ずかしさで喉が渴き、額に汗が滲む。

「よ・・・ようし。入れてやるぞ・・・。」

サンプルは此処までです。